われ、かく戦えり

―OB・OG通信―

青森北高校　52年卒業

氏　名　秋田　猛

現住所　青森市港町3－3－28

職　業　秋田クッキングスタジオ（自営）

高校総体の思い出

私が青森北高校の空手部に所属していたのは、もう十数年も前のことである。それでも、出場した試合は今でも昨日のことのようになつかしく蘇がえってくる。

私は運よく一年から卒業するまでの試合に出場できて、そこそこの成績を残すことができたが、私がその中で特に一番印象に残っている試合は新入生で初めて臨む高校総体であった。高校の部に入る前から空手をやっていて、先輩方の試合などは見ていたけれど、いざ自分の番になるとかなり緊張して舞い上がっていたのを覚えている。団体戦の予選が終わり、個人戦直前になって出場することが決まり、心の準備がつかぬまま試合がはじまり、一回戦を右中段前げりで勝ち、二回戦右中段前げり、三回戦…決勝、おもしろいように前げりが決まり、おそらく団体戦も含め全試合中段前げりで勝ったのは私だけだろう。もちろん試合中は何も感じなかったが、終わって帰る頃には右足のすねが太股のように腫れあがっていた。それでも初めて勝った喜びで、帰りの駅の売店で飲んだ牛乳のうまさは今でも忘れられない。

家庭を持ち仕事が忙しくなった今でも、どこかで、昔戦ってきたライバル達と出会い、なつかしい話をすれば、つくづく空手をやっていてよかったと思う。

これから志をもって空手を始める後輩諸君に、技術はもちろん、いい思い出を沢山作れるよう頑張って下さい。

七戸高校　53年卒業

氏　名　川村文幸

現住所　青森市

職　業　エムケー㈱東北販売

空手道部創立の思い出

私の空手道との出会いは今から17年前、県立七戸高等学校に入学して、すぐ、空手同好会をつくると言う事で、一年先輩の半強制的な誘いで入会したのが最初です。当時は、空手部として活動していた学校も少なく特に南部地区では光星学院と八戸水産しか無かったと思います。七戸高校空手道部の創立者であり私の恩師でもある大高徳司先生と四人の先輩が中心となり同好会をつくりましたが当時は、同好会と言う事で練習する場所が無くグランドの土手、学校の廊下、アスファルトの路上で練習した事も有りました。大高先生は基本を重視し、今思うと「良くやったなあ」と思う程、厳しい練習でした。今でも「気合が足りない拳立て十回」「そんな蹴りじゃ障子も破けない」など先生の口癖が懐かしく思います。先生の厳しい指導の結果、その年の新人戦で見事、団体組手で優勝する事が出来ました。あの時の感動は今でも忘れません。その実力が認められ、晴れて正式なクラブ活動として発足しました。三年の時に現在の指導者である小野寺先生に応用技を学び、二人の最高の指導者に恵まれた事によって高校時代の最高の思い出をつくる事が出来ました。また、入部して三年間、一人も脱落者を出さずにリーダーシップを取った吉田安広主将の

功績を忘れる事が出来ません。

しかし、良きライバルであり、無二の親友でもあった吉田安広君が、平成四年五月十日に急逝いたしました。生前の功績を称えて、空手部一同、ご冥福をお祈りしたいと思います。

青森北高校　54年卒業

氏　名　楠　美　義　人

現住所　青森市大野字片岡94－8

職　業（有）フェイス

青北流空手道

私の空手道は、青森聖士館道場に学び、故高坂先生を始め、桜庭先生ならびに諸先輩方の指導のもとに鍛練し青北空手道部で空手のおもしろさを知り、目覚めました。

当時ふり返って青北は上段カウンターで制したと言っても過言でなく、そのエピソードとしては、私が一年の時、全国総体（熊本）を見れる機会があり、熊本商業（当時全国優勝校）の上段カウンターを目のあたりにし、いい意味で刺激を受け、又、その頃、青森大学が東北大会を制し、青北ＯＢでもある今先輩にその大会での上段突きを指導していただきました。ただその頃、我々の練習場がなく講堂のステージの上でカーテンに向かって練習した思い出があり、そんな中、青北空手部創立者でもある須藤順司コーチの指導により、青北流空手を作りあげました。

私そのもの少年時代から県大会を制していた事もあり、各校にマークされていましたが、そこへライバルでもある内山千早が頭角を表わしてきた。内山曰く、「団体戦ではメンバーを信じて、自分が勝てばみんな勝ってくれる」という具合に、春季は、団体組手「青北決戦」、総体も下馬評通り優勝、個人も私は準決勝で敗退したが、内山が制し、全国大会は団体一回戦敗退、内山は個人で三回戦まで進んだ。

今思えば、全国総体の前に東北大会（当時はない）があれば肩ならしが出来たのではないか？しかし、ここ何年か前から青森県代表の活躍が目覚ましく、我々青森県高校空手部ＯＢとしては、その活躍が励みになります。最後に、心から空手王国青森を祈願します。

青森西高　54年卒業

氏　名　石　田　はるみ（旧姓浜名）

現住所　青　森　市

職　業　保　母

第四回インターハイに出場して

昭和52年、高校二年生だった。我校も同好会から空手部に昇格し部員も増えた。

女子の空手部員は県内でも多くはなかったが練習の効あって総体で団体型、個人型で優勝し、第四回全国高校空手道選手権大会に出場が決まった。全国レベルなど何もわからず青森県代表として顔出しできる程度と思った。関係者の皆様には申しわけないが倉敷というめったに行けない遠い所とあって物見遊山という気持ちもなきにしもあらずだった。

会場に着いて、そんな気持ちも飛んでしまった。練習時すでにすごい気迫、見た事もない流派や同じ型でも間合いのとり方や技の速さがまるで違い、すっかり気おくれしてしまった。でもここまできては精一杯やるしかないと試技に臨んだ。

団体型ではもう少しのところで予選落ち、

個人型では四十名程の中より決勝進出の八名の中に残った。思いがけない事だった。決勝では緊張のあまり手足はしびれ目はちかちか、型は「ジオン」だったが無我夢中でどう動いたかさっぱりわからない。第六位の賞状をいただいた。すぐには実感がわかなかった。まったくの偶然と思った。

そして他に高校時代、練習嫌いの私が総体など計六回優勝できたのも、当時顧問だった高山先生、市内の道場の故高坂先生、他先輩方のご指導のおかげと思う。特に故高坂先生にはいつでも基本を大切にせよと教わり、力のこもった気合いは道場中に響きとてもこわかった。決勝の「ジオン」はきっとへたくそと笑われたと思う。なつかしい思い出となった。

千葉学園高校　55年卒業

氏　名　木村一美（初代主将）

現住所　八戸市

職　業　(株)前原時計店 ヴィアノヴァ店

「空手道を経験して」

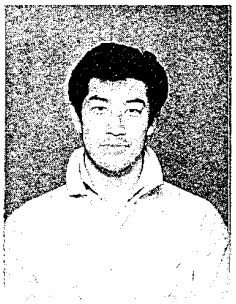
三十路に突入すると、シミ、皺、白髪の三つの〝シ〟が気になり出すよと言われ、へらへらしながら、まだまだ先の話しと余裕こいて笑っていたのも束の間、自分自身も例外ではなかったと、朝晩、鏡の中の自分にただただ、溜息しか出てこない今日この頃。本当に空手をやっていたの？と誰もが信じられないと言われる程、筋肉も何もない身体。あー情けないったらありやしない。卒業してからもちょっとは運動しとくんだった……。

思い出すのが難しい位、昔し昔しの若い頃ブルース・リーの燃えよドラゴンを観に行ったのが運のツキ。ブルース・リーそのものは私の好みのタイプではないのだが、何度映画館に足を運んだ事か…。その日以来バレーボールから一転して空手道に填ってしまう事になった。しばらくブランクがありほとんど忘れかけていたものの高校入学と共に「空手道着がもったいない。」という不純な動機で再び始める事となる。

愛好会からのスタート。いくら稽古しても愛好会では高総体には出場できない事を知り、すぐさま生徒会長の所へ殴り込み。（そんな事はしてない。）たいした苦労もなく部に昇格。後は稽古に明け暮れる毎日、でもなかったかな？。今思い返せばよくあんな厳しい稽古をしていたなぁと、自分をほめてあげたい気分でもあり、もっと稽古していれば、賞状やトロフィーがもう少し増えたかなとも…。

空手道を経験したというだけで（ではないのだろうが）就職もスムーズに決まり市内脱出を図ったのも三年半で終わり、現在、身体は小さいが態度の大きい社員として、今の会社にお世話になり早いもので五年目になる。人と違ったスポーツを経験したという事で、話題に事欠く事はあまりなく、楽に人と話しができるようになった。そんな事が今の仕事にも役立っていると思う。どこで、どんな事が役立つか不思議なものである。

空手道をやって良かった。良かった。



弘前南高校　55年卒業

氏　名　中畑　要

現住所　埼玉県鳩ケ谷市

職　業　川口北高校教諭

最　強

空手を始めて十数年が過ぎた。人生の半分を空手と過ごしてきたことになる。空手を始

めた動機は「最強を目指して」と言うところだろうか。

高校時代は、汽車を使って通学していたが、帰りには駅の階段の昇り降りがきついくらい疲れていた。その上、週三回は帰宅後道場へも通った。毎日朝から夜まで強くなることを考えていた。それゆえか、試合になるとメチャクチャ燃えてきて、今思うと、ほとんど反則すれすれの技ばかりやっていたように思う。いや反則そのものも多かった。

高校卒業後、弘前大学に進み、空手を続けた。学生時代もその心意気は冷めることがなかった。そして大学卒業後埼玉へやってきたが、心意気はますますエスカレートした。ルールに係わらず、可能な限り大会に出て、年間二十ほどの大会をこなした。

一つの思い出話をあげよう。ある時、知人からキックボクシングに出ないかと誘われた。私は当然のごとく参加を希望した。しかし、そのためには約十四キロの減量が要求された。一日の食事が生卵二個とニンニク二かけらのみ、そして炎天下雨ガッパを着てトレーニングをするという日々が一カ月ほど続いた。それでも試合前日、体重が五百グラム多かった。その夜、口にチリ紙をつめ、つばを一晩中出した。さらに計量直前には、かんちょうを打って出せるものはすべて出した。七十二キロのリミットを七十一、四キロでパスした。最高の喜びだった。試合もKO勝ちした。

とまあ相変わらずこんな日々を過ごしている。

青森北高校　56年卒業

氏　名　伊藤法行

現住所　弘前市大字若党町46－1公舎B－2

職　業　警察官（県警機動捜査隊弘前分駐隊）

二十周年に寄せて

高空連二十周年おめでとうございます。ひと口に二十周年と言いましても、高空連が発足した年に誕生した赤ちゃんが成人式を迎える年齢にまで成長しているのですからその道程は辛く険しく厳しいものであったと思います。

私は、高空連が発足して六年目にあたる昭和五十三年に青森北高校に入学し、何ら迷うことなく幼い頃から憧れていた空手道部に入部しました。それからというもの私の生活は朝から晩まで空手一色で、空手をやるために高校に行き、空手をやるために生きているようなものでした。

現在テレビで活躍中のヨッチャン、ウッチャンこと楠美、内山両先輩をはじめ諸先輩の厳しくも愛情？ある御指導のもと諸先輩の素晴らしい技を吸収し、自分なりに工夫し、常にどうすれば勝てるのか研究し、授業中であっても私の頭の中には空手しかありませんでした。（おかげでテストは最悪）

その甲斐あってか団体戦では連覇を成し遂げ、個人戦も新人戦、春季、総体と三つのタイトルを手中にし、東北大会個人組手優勝、インターハイ個人組手第五位という戦績を残すことができたのです。

空手は私の人生の中で最大のドラマをつくってくれ、また目的を達成するためには「努力」、「忍耐」、「工夫」の三つが必要であることを教えてくれました。

空手道という、世界に誇れる日本の武道を通じ、立派な青少年の育成のためにも、高空連のますますのご発展を祈念いたします。